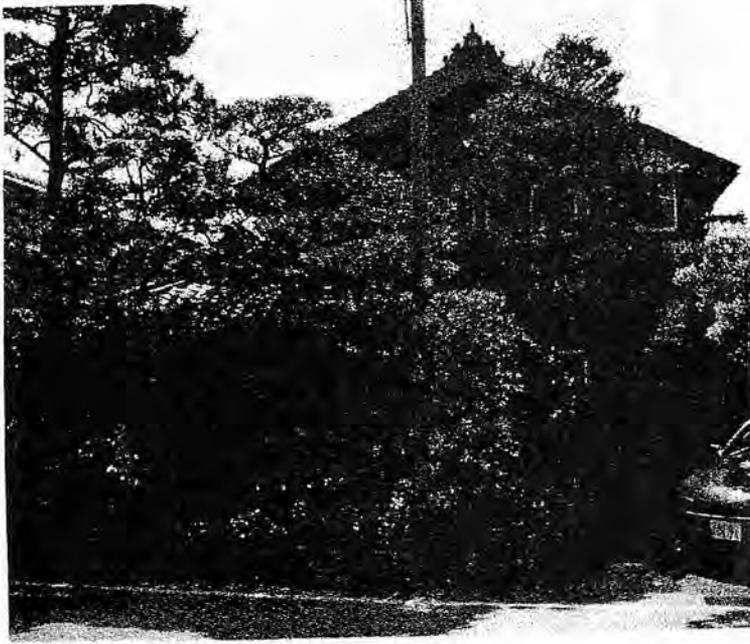


「もへいどん」は肝煎りで、後ろから見れば、福島田の田が「一目瞭然」に見える地所に座ったと思う。

福田本家は、扇の要に位置し、福島田の畑全部を監視できる、存在であったと確信する。

「もへいどん」の囲炉裏にある、自在鍵を見るたびに重厚な福島の、世話役を努めて来た、大家の貫禄をしみじみと感ずるのは私一人ではないであろう。

また敷地内にある、戦死者の顕彰碑は、福田さんの「いつちよさ」と同じ戦線で亡くなった先代の碑である。豊かな胸板を思い出す。



松井さんは、醤油の小売をしていた。

東の方を向いて建っていたので、何時も美しい白山の姿がながめられた。

昔の醤油は、何故あんなに甘かったのだろうか、小売の樽を運びながら、滲み出る醤油を指に付けて舐める、舐めながら帰った、遠い日が懐かしい。

岡田さんは、何時も機音をさせていた。

吉岡の分家に当たる、吉岡さんも機業であった。友人の寛司君は誠実そのものの友人であった。

「塩小売」という、美しい鉄板の看板を今でも思い出す。

塩が専売であったからか、統一された看板が、高林さんの家に架けられていた、また他にお菓子も小売されていたように記憶するが鮮明ではない。

物腰の丁寧な「おばあさん」がいて、親切であった。

美しく、歯を「おはぐる」で染めていた。最後の婦人ではなかったろうか。

工さんは、大きな養鶏場を経営していて、鶏肉を販売していた。